

明治四十三年 紀元二千五百七十年
 本紙 一校金二錢 一ヶ月前金所定
 定價 三ヶ月前金壹圓 六ヶ月前
 金貳圓 郵費一ヶ月十錢
 月曜日及大祭日の翌日は休刊(日刊)
 廣告 五號活字十七字一行情金
 料金 五十錢 鋪報特別廣告五號活
 字十七字一行情金十錢
 發行所 京坂西馬場 高木久馬 太
 印 刷 所 京坂西馬場 高木久馬 太
 發行所 京坂西馬場 高木久馬 太
 發行所 京坂西馬場 高木久馬 太

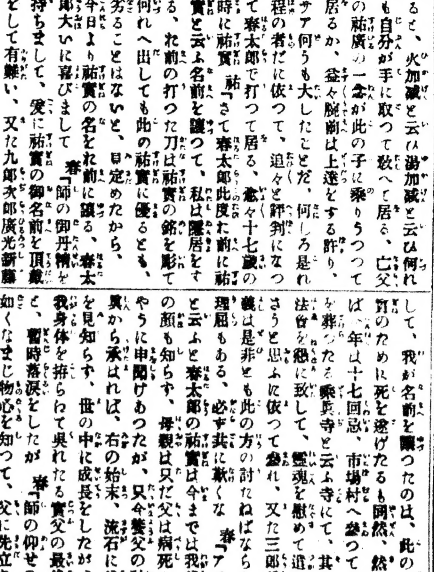
臨機應^{てきおう}の措置に出でざる可^べな^{もの}

は三万八十五圓の由なり

かんやう、何事も天の爲す所

●兇漢安重根埋葬地

10



一、本校第一學年ニ入學スルコトキ者ハ年齡十二年以上ニ

四、保證書

3

樂ほぞ、よい道

天

1. *Journal of the American Medical Association*, 2000; 284: 1039-1044.

大規模町

電話一五〇

營業

ぶぶぶいません、此

月

本店電話二四八
支店電話二六六

本店電話二四八
支店電話二六六

べし 韓國に於て

吾が國民の忘れんと欲して而も忘るゝ趣はざる陸軍紀念日は昨年十月其第五回を迎へたる駐軍司令部は例年の通り之が祝賀會を龍山岡部境内に舉行し日韓官民無慮二千金の來賓に萬余の特別觀覽者ありてさしも必要たる會場も立錫の餘餘餘實な

設備	に於て之
を交	要の事な

口 口影をやる大柱間わめて其前に高さ三
丈余の番兵を掌を固めて來賓を諷み迎
かへ恐ろしき言はんべのやなし恐ろ
の門へ入れば主人の將校十餘名最
丁事に迎へ導き己れ難の高兵奴と振
顧みれば何んだ馬鹿々々しい有合せの
毛布で固めし模倣人形なりけり彼ど是
の事なるを

り其はいへ商

左側には博多二〇加あり自轉車曲乘あり
右側には妓生の舞踏あり聲歌あり宛
撲あり三味・太鼓の囀の音相和して宛
然歟人の浅草公園を觀るが如し特に數
十の勇士が入り亂れて試合へる銃槍術
及薩摩名物の踊躍り其勇壯活潑見る
からに心地飽く此見物に饒飲が下り

昨十一日
薩に四日

開放せ
 して該
 條文は

口
場に表れは蕎麥店に腹鼓を打つものゝた
でん店に煩張るもの下戸は汁粉店に上
戸を笑ひ上戸は酒店に兜を燈ぶして威
勢を誇らし地盤露けとなびて潮風を草の太
平の鼓と唱へたなびき新國ある内
に號外々々の聲響きよ奉天の大會戦其
結果如何と片煙を吞ひて待ち焦かれた

制定せしめ
相違なく
三連
換せるる
約定書
訂

幾干に
く食堂
の要な

物資
 且つ
 の苦
 居れ
 所
 内
 地は
 東南約四百米突の處に地雷を爆發す
 云ふといふと其地點に奔り高地に駆け
 登れば天地も砕けんばかりの轟然たる
 大變動龍捲きの如き爆煙を捲き上げて
 遠近に燃焼しなした時四十分の爆
 竹を合間に食堂に入れば數百坪の大地
 に天幕を張り詰め滿洲軍が戰地に佳節
 京城警

種

事長	熱心	驚愕	漸次	對峙	觀察者	八十人
て心地殊に好くんや奉賓の韓人の如	たる春菜類みに薄らき春風醉顔を吹き	下萬葉を奉唱して宴を催せり當日は料簡	を爲し君が代の美樂として　天皇登殿	と代表して亦一片の答辭	選べ石原長官兼賓と代表して之に答へ	たり而して大久保司令官一場の挨拶を
外國賓	郵便使	切手暗	振出函	郵便便	外國為	郵便使

來會

氏に
するを得しは皆是れ吾が皇の御稜威
を去
と申すべし

本月

森陽に向ふど
建築土木等の丁

平壤炭の輸
所にては近く
煤炭所送り無
開始する由な
日約五十輛の
元山より鐵

なりたる二千

取引所と發

取引所發起人
より京城ホテル

英領事館員
駐副領事に榮轉
員イーエーチホ
シンタクホテル
韓銀總裁の
國銀行總裁には
兩三日中に認

告げたれば来る
神の途に就く筈

●菊地局長の
察中の菊地商工
歸着し今十二日
總領事出發
南大門發列車に
少將の入京

は十日入京天

元氏の入京
二一昨十日入京
有兼富氏入京
立の氏は十日入京
事務官歸任
政課長の氏は
太郎氏退京

事務官の退京

氏は十日島教院
本所長の歸任
業務所長の氏
龍山通信
運管敷設
路に水道敷設の

會社との交渉不
に属する元町通

可を得たるや
工事を進め目下

